

調査報告

青森県におけるリンゴのナミハダニに対する殺ダニ剤の効力の推移

地方独立行政法人 青森県産業技術センター りんご研究所 き木 むら村 よし佳 こ子

はじめに

青森県ではリンゴを加害するハダニ類のうち、ナミハダニ *Tetranychus urticae* とリンゴハダニ *Panonychus ulmi* の2種が防除対象となっている。青森県病害虫防除所の調査によると、この10年ほどはナミハダニが優占しており、リンゴハダニの発生は少ない状況が続いている(図-1)。

ナミハダニは世界各地に分布する広食性のハダニであり、果樹だけでなく、野菜、花き等の様々な作物に発生して被害を及ぼすことから重要害虫として位置づけられている(江原・真梶, 1996)。

ナミハダニの防除は、化学的防除が主体となっているが、本種は薬剤抵抗性が最も発達しやすい害虫の一つであり(江原・真梶, 1996; 刑部・上杉, 2009)、現場ではしばしば薬剤抵抗性が原因と見られるナミハダニの多発が起こってきた。

このため、生産現場では殺ダニ剤の効力に対する関心

が高く、モニタリング調査の実施とその結果の情報発信は、効率的な防除を行ううえで極めて重要なものとなっている。りんご研究所ではこれまで、随時、効力検定を実施し、その結果をハダニ類の防除指導に反映してきた。これまで蓄積したデータを基に、現在普及している殺ダニ剤の効力の推移についてまとめた。また、新規殺ダニ剤の効力特性を明らかにしたので、それらも併せて紹介する。

I 薬剤効力検定

2003~17年(2009~11年および2014年を除く)に、青森県内のりんご園から、ナミハダニの寄生しているリンゴの葉を採取し、室内で栽培したインゲン(品種‘金時’)にナミハダニを採取地点ごとに接種して、16L8Dの日長条件、23~25℃の温度条件下で十分増殖させた後、供試した。

薬剤として、BPPS(30%)水和剤750倍、ミルベメクチン(1%)乳剤1,000倍、ビフェナゼート(20%)水

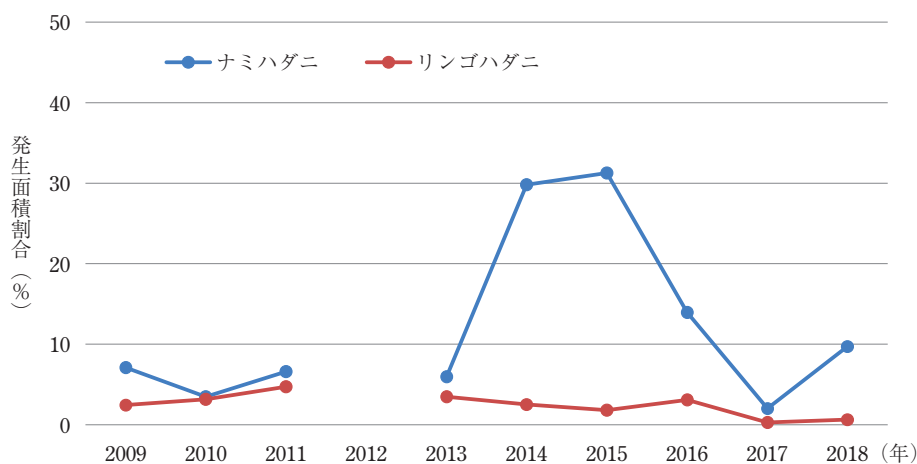


図-1 青森県における発生面積割合(青森県病害虫防除所, 有害動植物発生予察事業年報を改変)
※2012年はハダニ類として調査。

Effect of Acaricides on the Two Spotted Spider Mite *Tetranychus urticae*, in Apple Orchards in Aomori Prefecture. By Yoshiko KIMURA

(キーワード: 交差抵抗性, 殺ダニ剤, ナミハダニ, リンゴ)